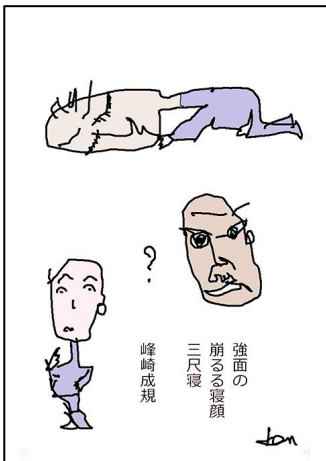


■今月の特選句

2020年9月



強面の崩るる寝顔三尺寝

峰崎成規

三尺寝は職人が狭い場所で昼寝をすることに由来する。強面の男が三尺寝で童顔のようなやさしい顔になっているのがおかしいね。



蟻の顔よく観てみれば日本人

土屋泰山

せつせと懸命に働く姿は、まるで日本人そのものである。蟻が日本人の顔ともいえるが、没個性で働き虫の日本人の顔が蟻に似ているとも。



帰省せずオンラインにて済ますなり

井口夏子

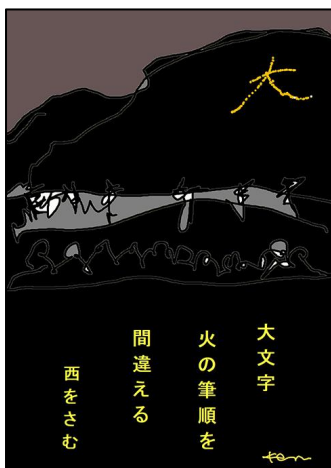
時節がらピッタリの時事俳句。帰省子を待ちわびていた親たちの落胆の一方、子ども世代はオンラインが便利で楽だわとアッサリしたもの。



銀河系歩いて来たか天牛は

桑田愛子

「天牛」は、カミキリムシのことで中国での表記。触覚が牛の角に似ていると思ったらしい。天の牛ならば銀河系から来たのは間違いのないね。



大文字火の筆順を間違える

西をさむ

京都の「五山の送り火」は五山それぞれで火の点け方が違う。「左大文字」は筆順に火を付ける。ひょっとしてあり得るかもと思わせて可笑しい。



発条仕掛けゆるみしものも時計草

工藤泰子

時計草の花はその名の通り、アナログ時計に似ている。発条(ばね)仕掛けの時計に見立て、さらにその発条のゆるみを詠んで面白い句となった。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

泡の無いビールの如し休刊日 ・・・ならばこの日は休肝にせむ	田中早苗
六月の花嫁キスは終息後 ・・・いよいよ憎き新型コロナ	荒井 類
青虫の気分夏葉のジュース飲み ・・・きつとあなたは蝶々になる	石塚袖彩
刈り込まれ丸裸なる大暑の木 ・・・無理に脱がせて罪は問はれず	小笠原満喜恵
カルシウム補給を梅雨の傘の骨 ・・・お日様に当てビタミンDを	吉川正紀子
行水は洪水に似て氾濫す ・・・三峡ダムも舌を巻くほど	稲葉純子
飲んだあと蝮酒だと知らされて ・・・騙し続けてほしかつたなあ	田村米生
新涼の季語を裏切り寝苦しき ・・・裏切つたのが季語でよかった	長井知則
転失気(てんしき)とやらを一発青嵐 ・・・放屁を詠んで臭みはあらず	相原共良
岡山で乗り換え桃は海渡る ・・・令和時代の桃太郎伝説	八塚一青
背徳となるか腰踏む敬老日 ・・・手加減ならぬ足の加減も	柳 紅生
吾の指にアクを移して蕨の澄む ・・・蕨の料理のアク無き戦い	月城花風
良い仕事してる物なし土用干 ・・・鑑定団に出すまでもない	伊藤浩睦

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

夏瘦に一番善事の鯉かな	相原共良
嬰抱く人犬を抱く人片かげり	相原共良
蟻の列はずれて歩むへそ曲がり	青木輝子
控えをれカルガモ親子のお通りじゃ	青木輝子
羽抜鶏古妻元気で留守がいい	青木輝子
浮いてこいペーターヴェンの転居先	赤瀬川至安
寺の百日紅住職の口も滑る	赤瀬川至安
体調の悪したこ焼のあと昼寝	赤瀬川至安
鉄線花マスクはもはや季語ならず	荒井 類
夏の月BGMは日野てる子	荒井 類
休肝日明けてビールの一気飲み	井口夏子
爆音のバイクに苛つく熱帯夜	井口夏子
鳥獣楽園人間来ぬ間の夏の山	池田亮二
終活講座幽霊になる法教えます	池田亮二
おとつとギリギリかわす蜘蛛の糸	石塚柚彩
叱られて蟻好きの孫蟻を踏む	石塚柚彩
つくずくとつくつく法師の一生かな	泉 宗鶴
秋立つや腹立つことの多き世か	泉 宗鶴
蜜と密虫は甘きに山は夏	泉 宗鶴
土用干砥ぐか捨てるか赤いわし	伊藤浩睦
土用干隅に置かれて偽系図	伊藤浩睦
鳳仙花いつか弾けることあれど	稲沢進一
朝顔や明日の色を予約して	稲沢進一
秋の蝶風のうわさにあるけれど	稲沢進一
芳しき青紫蘇の香が鼻を刺す	稲葉純子
カレンダの土用の丑のうなぎのう	稲葉純子
静かさや爺と孫らは昼寝して	井野ひろみ
ねこじゃらしモデルハウスの庭に生ふ	井野ひろみ
太陽の甘さをギュッとミニトマト	上山美穂
トゲトゲがやはりシャキシャキキュウリ	上山美穂
とろとろにほっぺもとろけアイスクリーム	上山美穂
黒とんぼ貴婦人のごと羽根ひろげ	梅野光子
じじばばのラジオ体操夏の朝	梅野光子
切り子のグラスにちよつと照れてゐる麦茶	梅野光子
バーナーで毛虫焼きしやランチ時	遠藤真太郎
真黄色に燃えるトマトよそれはそれ	遠藤真太郎
夏瘦せは腸の間取りの悪さかも	遠藤真太郎
蟬の声今年の宿はこの木です	大林和代
こすごと消毒の手の暑さかな	大林和代
一日を睨みつけたる日光黄菅(きすげ)	大林和代
浴衣着て踊りの師匠シャナリシャナリ	小笠原満喜恵
焼きナスの大好物なる夫おもふ	小笠原満喜恵

天の川憎む再会ならずして
 羽根からひげまで左右対称天牛(カミキリムシ)
 秋の暮河口に鯉の横たはり
 十万の風に吹かれて風見鶏
 アベノマスク使われぬまま夏果てる
 下灘駅線路のそばに夏の海
 空蟬が何か鳴いたと思わぬか
 三密の茶髪金髪ミルクセーキ
 落し文暗い秘密があるやうな
 みんなのシャワーをあびて蘇生する
 あめんぼの飛び六方の舞台かな
 今朝からは空蟬としてここにあり
 へへへへの形は鷗夏の海
 田水張り飛行機雲を補足せり
 帰省子の質問攻めにあふ夕餉
 箱庭をにらむ刑事の第一感
 夏マスク中はいつしか口呼吸
 羅の羽織笑顔の新棋聖
 コロナ禍を拡散GOTOキャンペーン
 冬の季語マスクでうろちよる梅雨明ける
 エコバック替わりの鍋で豆腐屋へ
 西瓜抱き牛歩の様にレジへ行く
 神官の祝詞あつさり海開き
 ハイタッチ抱いてハグして西瓜買ふ
 騒がしきこの世は知らずつばめの子
 アマビエの肩の荷重し夏祓
 盆僧の袂パタパタミニバイク
 どこかで返事 呼んでみただけ
 たまの雨は恵と言うマスク作り
 枝柱に頼らない向日葵発見
 算盤を今でもはじき生身魂
 はたた神停電させて光りけり
 同人誌類似俳句や走馬燈
 消毒は身の内よりと缶ビール
 地球からの脱出も視野に窓の秋
 蚊対策我にも一枚防護服
 浮世とは面白きとこ秋刀魚の値
 颱風の出生率がうらやまし
 みんなの啼くたび憶ふリンカーン
 キリン舎をへくそかずらの伸び切つて
 コロナ禍の先祖も自肅盂蘭盆会
 ナナハンを洗ふ駐車場の夕焼
 空想が舞ひ降りるなり扇風機
 選ばれし者の恍惚蓮の花
 心身の至福の時の涼しさよ

岡田廣江
 岡田廣江
 岡田廣江
 金城正則
 金城正則
 金城正則
 久我正明
 久我正明
 久我正明
 工藤泰子
 工藤泰子
 桑田愛子
 桑田愛子
 小林英昭
 小林英昭
 小林英昭
 佐野萬里子
 佐野萬里子
 佐野萬里子
 壽命秀次
 壽命秀次
 壽命秀次
 白井道義
 白井道義
 白井道義
 白井道義
 鈴鹿洋子
 鈴鹿洋子
 鈴木和枝
 鈴木和枝
 鈴木和枝
 高田敏男
 高田敏男
 高田敏男
 高橋きのこ
 高橋きのこ
 高橋きのこ
 竹下和宏
 竹下和宏
 竹下和宏
 龍田珠美
 龍田珠美
 龍田珠美
 田中 勇
 田中 勇
 田中 勇

ゴキブリは天国行きよ婆の腕
 高級魚の仲間入りせし秋刀魚かな
 梅雨明の朝からとんぼすういすい
 ちちははか墓石に寄り添ふ青蛙
 瘦せた脚によつきり夏のパンツから
 少年の首筋涼しブラピかな
 炎天下コロナウイルス消滅せよ
 くま柄のバックにすいかの翁かな
 ナイターの猫語ニヤイター猫も観る
 毛虫とてベンチ這ふのは命懸け
 蓴菜や密接せずに密集し
 社会的距離に靴脱ぎハンモック
 はばかりを抜ける涼風鼻つまみ
 房総の枇杷びた一文負けない
 孫に云ふ大角豆(ささげ)は小豆のお姉さん
 掌で踊つて見せよ鳳仙花
 裏木戸を開けて母待つ盂蘭盆会
 初恋のもしやあの娘が盆の道
 思春期に戻って触れたい鳳仙花
 今コロナ遠きは昭和の終戦日
 ビアガーデン間隔空けて盛り下がる
 扇風機持ち歩く世となりぬ
 雷鳴に念仏称へ鍼治療
 逃げ上手な百足の足に纏れなし
 少年の夏知りつくすカブトムシ
 遠き日のアルバムのごと古浴衣
 朝顔はこの世を信じきつて咲く
 背を伸ばし二本の胡瓜の丈くらべ
 コロナ禍に夏痩せならぬ夏太り
 プチトマト長雨に青ざめてみる
 梅雨最中老化の薬はマイペース
 梅雨最中パジャマのズボン護謨ゆるむ
 野の花と仲が良すぎる天道虫
 かかわりの甲子園ああ夢と消え
 ウィズコロナ大ジョッキーで生ビール
 風鈴やコロナコロナと鳴き響く
 おそろしき世を生きていてとてん
 「出口」光る店舗を探す夏の旅
 風通し良過ぎて不許可レースのマスク
 乙姫の卓袱台返し土用波
 鰻重を待つ間の至福酒一合
 四肢で入る障子の棧に操られ
 波平もワカメもフネも秋の空
 浮かか沈むか考へる大西瓜
 赤か黄かどの色にせむかき氷
 川泳ぎ背なに子載せ竜の父
 突然のあんパンチ効く夏休み

田中早苗
 田中早苗
 田中晴美
 田中晴美
 田中晴美
 谷本 宴
 谷本 宴
 谷本 宴
 田村米生
 田村米生
 月城花風
 月城花風
 土屋泰山
 土屋泰山
 長井知則
 長井知則
 西をさむ
 西をさむ
 花岡直樹
 花岡直樹
 花岡直樹
 久松久子
 久松久子
 久松久子
 日根野聖子
 日根野聖子
 日根野聖子
 廣田弘子
 廣田弘子
 廣田弘子
 藤森荘吉
 藤森荘吉
 藤森荘吉
 細川岩男
 細川岩男
 細川岩男
 南とんぼ
 南とんぼ
 南とんぼ
 南とんぼ
 峰崎成規
 峰崎成規
 椋本望生
 椋本望生
 椋本望生
 向田将央
 向田将央
 向田将央

失笑す声を力に羽抜鶏
 隠さずに蝨合戦闇てらす
 空蟬をもっとくれよとせがむ孫
 ここはまずほどほどにして昼寝かな
 何をして今日の暑さをやり過ごす
 買ふものをひとつ忘れて茗荷汁
 盆櫓マイクの要らぬ喉仏
 彼の世から戻りし眼昼寝覚
 疑ひの眼泳がせ夏マスク
 蟬時雨記憶の中に子らの声
 あさがおに耳をあてれば水の音
 大花火進化の腕の見せ所
 乗りてすぐ降りる心配ハンモック
 大の字になつて退屈夏座敷
 背越てふ言葉を覚え船料理
 ポテサラにいつもの顔で胡瓜いる
 カラフルなカレー立派な夏料理
 秋あかね天秤秤狂はせて
 大花火写楽顔して喝采す
 視力低下に手元のものも見えぬ初夏
 初夏や優しき友のにぎり寿し
 カラオケに飛び入り参加の夏の夕
 盆までが寺の経費の納入日
 夏の蚊は無住寺に住み水を飲む
 止り木を追われ夏夜の影となる
 空蝉のごとアマゾンのパッキング
 「配給は砂糖ばかり」夏の空
 無花果に野鳥屯す空家あり
 風に乗り風の道ゆくうすばかげろふ
 蟬時雨異空間への扉かな
 夕曇りかわほりたちの時間かな
 草壁の刈られてなおや風の道
 真夏日や恋しき北欧の銀世界
 穂の長けて耳に教わる風の道
 梅雨明の悲鳴野菜の高騰に
 忍び寄る玄関までも大西日
 天界の光のオブジェよ大花火
 半額をよるこべば鮓の手土産
 小耳に挟んだ枝豆の納豆
 紫陽花にピンクのぼかし雨上り
 野良着でいっぷくさるすべりはピンク
 蟬しぐれみんな無口になりけり
 朝食のとろみとろとろモロヘイヤ

村松道夫
 村松道夫
 村松道夫
 村山好昭
 村山好昭
 村山好昭
 百千草
 百千草
 百千草
 森岡香代子
 森岡香代子
 森岡香代子
 八木 健
 八木 健
 八木 健
 八塚一青
 八塚一青
 柳 紅生
 柳 紅生
 柳澤京子
 柳澤京子
 柳澤京子
 柳澤京子
 柳村光寛
 柳村光寛
 柳村光寛
 柳村光寛
 山内 更
 山内 更
 山内 更
 山岡純子
 山岡純子
 山岡純子
 山下正純
 山下正純
 山下正純
 山下正純
 山田真佐子
 山田真佐子
 山田真佐子
 山本 賜
 山本 賜
 山本 賜
 横山洋子
 横山洋子
 横山洋子

梅雨の傘タクシー車庫に逆さ吊り
消防車大夕焼に歯が立たず
一粒が万のよろこび早稲の飯
田を刈つて親爺おらほのコメ自慢
もの書くも誉められもせで暮の秋
早よ起きろ起きろと迫る蟬時雨
照焼にふはふは顔の夜の秋
朝顔にのぞかれてゐる四畳半
幽霊や寝起きのお岩ふうらふら
捌く手に鯛が残す骨の音

吉川正紀子
吉川正紀子
吉原瑞雲
吉原瑞雲
吉原瑞雲
渡部美香
渡部美香
渡部美香
和田のり子
和田のり子